武蔵野日曜特別講筵

「羔の婚姻」（上篇）羔

１９７３年１月２１日
小池辰雄

解題　序論　第１歌「コスモス」　第２歌「シオン」、第３歌「天使」、第４歌「宇宙」、第５歌「地の創造」　第６歌「人の創造」、第７歌「安息」、第８歌「明星の没落」、第９歌「禁断の果」　第10歌「羔」、第11歌「嘆き」、第12歌「日のすずしきころ」、第13歌「呪はれし地」　第14歌「血は叫ぶ」、第15歌「洪水」、第16歌「バベル」、第17歌「選民」、第18歌「窖の煙のごとく」、第19歌「モリアの山」　第20歌「棘のなかの火」、第21歌「過越」、第22歌「シナイ山」　第23歌「幕屋」、第24歌「ダビデのひこばえ」、第25歌「静かなる細き声」、第26歌「かなしみの人」、第27歌「はるかなる曠野のなかに」　第28歌「俘囚」、第29歌「時は満てり」、第30歌「降誕」、第31歌「ヨルダン」、第32歌「誘惑」、第33歌「祝福」　第34歌「ゲッセマネ」、第35歌「ゴルゴタ」、第36歌「復活」（参考）藤井武選集の栞（第９）――本選集完結に際して

●解題

第１歌は序曲、夫人の逝去とこの詩の成り立ちを歌う。第２歌は世の創めの前に於ける神と聖子（みこ）との対話にして、聖子の佳耦（とも）として人類を創造し給う聖意図を歌う（コロサイ書１・５～17節参照）。第３歌はこの聖意図に対する天使の讃美と、聖意図実現に関する天使の任務を歌う。第４歌、第５歌は聖子の佳耦（とも）たるべき「美しき者を迎え入るべき栄えある宮殿」として宇宙星辰（せいしん）、及び揺籃（ようらん）として地を創造し給えること、第６歌は「聖き新婦に立つべき」人の創造、第７歌は創造終りて神の安息と歓喜を歌う。第８歌は聖子と人類との婚姻に対するサタンの嫉妬と没落、第９歌はアダム、エバの堕落、第10歌は堕落したる人類に対する神の怒と愛に対し、人類は己が佳耦たるべく造られしものとして己（おのれ）之と一体たり、人類の罪は己が罪なりとして自ら贖罪の犠牲たらんとし給う聖子の発言を歌う。第11歌はアダムの罪の痛悔、第12歌は神のアダムをもとめ給う愛、第13歌は罪の結果としての自然の歎きを歌う。それより人類歴史の進行にうつり、第14歌はカインとアベル、第15歌はノアの洪水、第16歌はバベルの混乱、第17歌はユダヤ民族の聖別、以下第28歌まで順次ソドム及びゴモラの審判、イサクの献供、モーセの聖召、出埃及（えじぷと）、十誡の賦与、幕屋の制定、ダビデ、エリア、イザヤ第53章の預言、エレミヤ、イスラエルのバビロン俘囚（ふしゅう）を歌い、第29歌に至りて旧約時代の準備終りて今や「羔（こひつじ）の許婚（いいなづけ）の日」来れりとなし、第30歌にイエスの降誕を歌う。それより以下バプテスマのヨハネ、荒野の誘惑、山上の嘉信（かしん）、ゲッセマネ、ゴルゴタを経て第36歌の復活に終るまではイエス伝の詩的表現である。而して最後に「聖（きよ）められし新婦をむかえて永遠の讃美を完（まっと）うすべく」キリストの再臨し給うを望む。要するに上篇

は新郎たる「羔」の完成を主題とする。――編者――

●序論

『羔（こひつじ）の婚姻』は、上・中・下とあって、中篇が一番特色のあるところです。『羔の婚姻』を大観しますと、聖書全般にわたるわけなので、これは大変なことなんです。聖書全般どころではない、キリスト教会史にまで、また日本の精神史にまで及びますから、３回でそれができるかが既に問題なわけです。先生がとにかく10年間かかって、１か月の３分の２は『羔の婚姻』に費やしておられた。雑誌〔『旧約と新約』〕の後の方にある散文は、氷山の所は『羔の婚姻』の詩の余韻である、註解的なもの。だから、先生の執筆伝道というものは、要するに奥さんが亡くなって、あとは『羔の婚姻』に全生命が、全生活が集中されていたわけです。それだけの生命賭けの詩であります。それをこの３回位でできるわけではないけれども、まぁしょうがない。『羔の婚姻』なんて申しましても、まだ「何のことやら？」という方もあるかもしれませんが。『羔の婚姻』について書かれた或る短文がありますから、あとで読んでもいいですけれども。

旧約の宗教は要するにヤーヴェーの神とイスラエルの関係において出来ている宗教です。詩篇23篇の「牧者と羊群」の関係、イスラエルの民は遊牧の民ですから――アブラハム自身がそうであった――牧人と羊たちとの関係です。詩篇23篇でこれが非常にうるわしく歌われている。個人の信仰生涯でもあると同時に、イスラエル民族の在り方がこの詩篇23篇で象徴的に語られているわけです。

それから、「主と僕（しもべ）」の関係。神は主であって、イスラエルの民は僕である。この主と僕の関係、これが極まっているのがイザヤ書53章です。「エベット・ヤーヴェー」「ヤーヴェーの僕の歌」という。「エベット」というのはヘブライ語の「僕」という字です。主と僕との関係は、汝の意志を復命して「はい」と言って、それを行ずる。これは使命的存在です。イスラエルの民は神の意志を行ずるべき民ですが、現実はなかなかそうはいかん。

それから「父と子」。これは本質的関係、あるいは実存的と言ってもいいですが、本質的な関係です。アブラハムがこのことを一番よく表している。アブラハムのイサク献供、創世記22章でそのある極限の事態が語られているわけです。

父と子。神は父であり、自分は子である。イスラエルの民は、ヤーヴェーの神にとっては独子（ひとりご）の如き民族です。この二つの関係〔主僕と父子〕――使命的、本質的あるいは存在的と言ってもいい――を全く一人のひとが完全に体現した。言うまでもなくキリスト・イエスです。「父よ」とはっきり、神を呼ぶ。そして自分は父の「僕」であるという。

「神の意志を、汝の意志を成させ給え。わが意志にあらず」

と言って、十字架にかかった。その

「十字架の死に至るまで従い給えり」

というのが「主・僕」です。「父のふところに在す（いま）」というのが「父・子」です。この「主・僕」と「父・子」、この関係を、関係としてただ頭で理解しているのではなくして、身をもってこの関係を現した。まさにこの関わりを身をもって現したのがイエスであった。

もう一つある。それが今やっているホセア書で表れてくるところの「夫と妻」との関係です。預言者ホセアがこのことを自分の痛ましき結婚体験において示された。非常にうるわしい関係で示されたのではない。藤井先生の方は非常にうるわしいんです。もう藤井先生の奥さんみたいな奥さんはちょっとそういないような女性です。ところが、ホセアの相手はそれと正反対で一番ひどい相手をもって――これがうるわしかったらダメなんです、藤井先生みたいなのでは困るんだ――これがしょうがない女の人。

ところが、イスラエルがそうなんだから仕方がない。イスラエルが神さまから離れてしまった。大体、イスラエルの以前にアダム、イブが既にまさに神さまに背いてしまった。そういう失敗の事態を通して――人類は落第生、落第人類です、人間喪失の人類――それを喪失から回復へ、パラダイス・ロスト（Paradise Lost）からパラダイス・リゲインド（Paradise Regained）へ持っていく。そのためには現実がそんなきれいごとでない。それがホセアです。だから今、ホセア書というのはそう簡単に進めない。ゆっくりやればいい。

これがこの「夫と妻」との関係。これは今度は「キリストとエクレシア（教会）」の関係において、このホセアに示されたところの事態を受けとって語っているのがパウロ。パウロという人はまた不思議な人です。

「キリストは頭（かしら）であって、エクレシアはその体（からだ）である」

「キリストは夫であって、エクレシアは妻である」

とエペソ書に書いてある通り。教会で結婚式というと、必ずエペソ書の所を読む。

藤井先生は奥さんがもし地上にずっといたら、この詩は出来なかったでしょう。やっぱり先生も立派な奥さんが地上にいたのではダメだった。先生も涙と血を通さないと。ホセアとは違った意味で奥さんは奪われて、天界へ往ってしまった。そこで今度は、先生はその立場から自分の体験を通して、『羔の婚姻』を歌わしめられたということになったわけです。

これが序論であります。この『羔の婚姻』の詩はもちろんダンテの『神曲』とミルトンの『パラダイス・ロスト』の二つが非常に先生のこの詩の下地になったわけです。ダンテの「テルツァ・リーマ」（Terza rima 三韻句法）という「三行詩」の構造で進んでいく。これはまさに藤井先生はそのまま踏襲しておられる。もちろんイタリア語と日本語は違うから、脚韻を踏むわけにいかない。けれども、またその格調は、7・7とか7・8とか、大抵14か15行でもって進んでいる。この叙事詩の格調は先生の全く独走的なもので未だかつてない。

大体、現代日本の詩壇が『羔の婚姻』という詩を知らないんだからね。現代詩集の中に『羔の婚姻』が入っていない。全く例外的な、キリスト教の純粋な宗教詩だものだから、認められない――認められないというか、みんな気がつかないんだ――それほど一般の世界は

宗教の世界から遠いわけだ。

……信仰詩といっても、それを本当に叙事的な構成でもってなしているとはちょっと言い難い。全体がそうですけれども。藤井先生のこれはエピック（epic）、叙事詩の範疇に入るでしょうけれども、非常に叙情的な要素が強い。その点、ちょっと惜しい。叙情的なものはあってもいいけれども、やはり詩としての構成はもう少し客観的にかつドラマティックに書かれるとよかった。非常に叙情的な調子が強いですね。

また、一つ一つの歌が、それぞれ一つ一つが或る意味においては完成しているわけです。叙事的・叙情的な詩で、非連続の連続といったような構造でもって出来ている。全体が大きないわゆる叙事詩とか、あるいは劇詩とかというものとは言い切れないような、そういう独特なものであります。しかし、この詩句そのものは実に素晴らしいです。

●第1歌「コスモス」

そこで、順を追いながら、ポイントをつかみながら進んでいきます。上篇は「羔（こひつじ）」という題で、「羔」の大部分は預言であるわけです。預言詩として意識的につかまえているわけではないけれども。

第1歌「コスモス」。「コスモス」という題は、奥さんの綽名（あだな）がコスモスというので、そこからきている。

1　目もはゆるコスモス、菊、ダリヤ
　　くまどるはうす紫の桔梗、
　　めづらし、薔薇の小花（おばな）さへ添ひ、
4　きよき者の門出（かどで）に栄（は）えあれと、
　　その面（かほ）おほひに胸かざりに、
　　秋は自然の誇りをつくした。
7　ああかくて平和に、しかし声なく
　　臥すは誰か、いま私の前に、
　　否、むしろ私のふところに。

これは奥さんの柩を前にして、たくさん花に飾られているその情景を第一歌はうたっているわけです。『羔の婚姻』の詩は上篇も中篇も下篇も全部、第一歌は非常に個人的に奥さんとの関わりのことを語っている。そこで夫妻――今、私は信仰的な角度からこれを見ていきますから――夫妻として、男と女、神とキリスト、キリストとエクレシア。そこで、

19　十字架ひとつ、さかづき一つ、
　　冠（かむり）も一つに備へられながら、
　　うらむ、凱旋を共にし得ぬを。

先生は、奥さんが亡くなって、自分も天界へ行きたくなってしまったと、正直そういう

気持ちもおありであった。けれども、お子さんがいるからそう簡単にはいきません。とにかくしかし、「夫妻が一体である」という、

「十字架ひとつ、さかづき一つ」

苦難も栄光も一つであるという。「冠も一つ」というのは栄光です。ということは今度は――いいですか、何も私は今、夫婦の話ばっかりしているわけではない――キリストとエクレシア、またキリストと我々個人、クリスチャンのこと。十字架を負ったキリストのその十字架をやはり、「私たちはキリストと十字架ひとつである」と。「十字架せられたり」ということは、ただ贖いの事態ばっかりでなくて、実存の面において「十字架ひとつ」、またキリストと「栄光を一つ」にしている。このことをその奥に読まなくてはならないわけです。

内村先生がこの告別式をやった。その時に内村先生が、

「神にも言い分がある」

と言った。一番、藤井先生がこれからだと思っていた時に、奥さんがもぎ取られてしまったから。伝道の真帆を張って舵をとって進みつつある時に、舵が折れてしまったわけだ。舵が折れてしまってどうしようかというようなわけです。ですから、「神さま、なぜこんなことをなさるか？」というわけです。まぁ相対的な原因はいろいろあります。何しろ、お子さんが大勢〔五人〕で、奥さんは伝道のことで重荷が強すぎたんだよね。身体があまりお丈夫ではなかったようですから。とにかく、

「神さまにも言い分がある。神を義とせよ」

という。

52　同じ壇の下にけふは黙して、
　　裂かれしわが骨、わが肉を前に、
　　「神を義とせよ」との奨(すす)めを聴く。

55　神を義と！　ああ然り、私のため
　　準縄(なは)はトペテの谷に落ちても、
　　わたしは神を義とすべきである。

塚本先生は、大震災でもって鎌倉で家が崩れて梁の下に奥さんが倒れて、奥さんは即死してしまった。これが９月１日（１９２３年）。藤井先生の奥さんは10月１日（１９２２年）。だからお二人は親友なんだ。藤井先生は内村先生に

「神を義とせよ」

と言われて、これが電撃のごとく響いた。塚本先生は、奥さんが亡くなった時に、

「神は愛なり」

と来たそうだ。それでよくその二人の先生の性格がわかる。塚本先生というのはちょっと融けたようなところのある人です。なかなか男気のある方ですけれども。藤井先生はやっぱり、詩を読んでいても――もちろん愛という深い面が出てきますけれど

も――義という面が非常に強い。

「教会のやつは、『愛、愛』なんて言っているがダメだ。神を義とせよ」

なんて仰っていたことを私は覚えています。義です。その「義(ただ)しい」といっても、ただ道徳的に義しいということではない。何でもいいから、神さまのなさることは義となして、

「深い義であって、それに対しては然り、アーメンと言うよりか他にないんだ」

と、全く降参したわけです。降参したけれども、それは先生だってやっぱり人間だから、また寂しくなってしまってどうにもならん。

85　言(ことば)に絶えたる日は始まる。

見せつけらるるおのが弱さよ、

見失ひたる神のさびしさ。

と書いてある。もし藤井先生が割り切ってしまって、もう「神は義だ」なんていうわけでいる人だったら、これは人間ではないですよね。先生もどうにもならなくて、もう聖書も読めないし祈れない時もあった。天地晦冥(かいめい)というようなわけでね。それで、詩篇をずっと読んでいった。そうしたら、詩篇102篇まできた。10節に、

「なんじ我をもたげて投げ棄て給えり」

という句にぶつかって、そこで動けなくなった。これだと思った。まぁいろんな人がいろんなことを言うけれども、慰めなんていう言葉ではどうにもならん。言葉に絶するわけです。そこで、「なんじ我をもたげて投げ棄て給えり」という、これほど先生にとってピタリの言葉はなかったわけです。投げ棄てられてしまった。もう参ったと。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と。詩篇22篇の1節も相当きたと思いますが、それより102篇10節の方が響いてしまった。

103　かく歌うた後にわが詩人は

一段と声をはげまして「なんぢ

私をもたげて投げ棄てたまうた！」

106　あやしくわたしの胸は躍った、

おのがさけびの反響を聴いて

さながら救ひを見つけたやうに。

と。時々、散歩をして、その散歩のことが書いてありますが。

139　「泣くな、私である、私である。

私がわがため彼女を呼んだ。

彼女の現在を私はよろこぶ。

と。神さまが呼んだ、「私がお前の奥さんを呼んでしまった」と。

「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの聖名(みな)は讃(ほ)むべきかな」

と、ヨブが言いました。与えてまた取り去ってしまう。このヨブは聖名を讃めたたえた。

ああ素晴らしい信仰です。藤井先生はいきなりそこまで行かなかったらしいけれども。しかし、気がついてみたらば、実は呼んだのは神の本願である。ダンテの『神曲』でなくて、その前の『新生』の中にも出ている。ベアトリーチェが天界に入ったのは、

「あんな存在は地上に置いておくのは惜しいから天上へ持って行ったんだ」

というような詩句があったはずです。神の本願がこれを呼んだと。それに気がついて、

142　このわが悦びを今みたすは
　　永遠より私の思ひであった、
　　今、汝らふたりの真昼時に。

145　今こそ時よ、げにこよなき時！

と。最悪の時を最善の時と歌ってしまったんです、今度は。「勇者には最悪は最善なり」と、ブラウニングの言葉にあったね。

　　美しきは天にかがやくべく
　　弱きは苦杯を飲み干すべく。

という句がその後に続く。十年間の結婚生活のあとで、五十年も羨（うらや）むような結婚十年間であったようなことが書いてある。

148　この時のため私は備へて
　　五十年も羞（はじ）ぢらふ十年を
　　吝（をし）まずすでになんぢらに与へた。

それほど先生は結婚生活そのものは恵まれてしまった。藤井先生の奥さんの一番下の妹さんを私はちょっと知ってますけれども、この人は多分一番お姉さん、藤井先生の奥さんに似ているのではないかと思う。非常に柔らかい、そしてどんな苦難にあってもいつもニコニコしているような人です。自分のその辛さや苦しさを見せない。非常におおらかな気持ちです。〔本文庫編集者註：藤井武の妻喬（のぶ）子の末の妹、西永玉子のことか。１９２９年頃に辰雄との縁談話があったという。「小池辰雄日記」1929/7/6,1930/7/7,1930/8/28 に辰雄の縁談関連の記事あり〕

そういうわけで、先生もそれで今度はいよいよ、自分は詩人でもないけれども、どうしても歌わざるを得ない。「もし自分が黙せば石が叫ぶであろう」なんていう句がある。

163　讃むべきかな、ひとつの十字架もて
　　あるひは撃ちあるひは贖ひ
　　かくて永遠のみむねを成す者！

166　福（さいわ）ひなるかな、召されてみそばに
　　聖きよろこびを充たす彼女は！
　　聖名（みな）のゆえに軛（くびき）負ふ私！

169　ねがはくはそこに彼女をして

ここに私をして暫しありて
合唱せしめよ、汝の栄光を。
172 汝、いと高き愛、とこしえの義、
汝にむかいて我らはうたわう、
新らしき歌を、『羔の婚姻』を。
175 わたしは素よりダビデでない、
またダンテでもない。しかし如何せむ、
黙さば石が叫ぶであらう。
178 おお父よ、子よ、聖霊の神よ、
わたしを聖めよ、わたしを強めよ、
私の歌を完からしめよ。アーメン

まぁ第一歌だけはそれだけのことを申し上げておきましょう。

●第2歌「シオン」、第3歌「天使」、第4歌「宇宙」、第5歌「地の創造」

第2歌「シオン」。「シオン」というのは、天界における神とキリストとの関係、即ち二位一体とでも言いますかね。聖霊のことはあまり語られていない。

52 完き永遠の愛はひとしく
まったき「我ならぬ我」を要める。
呼びかはすべき永遠の「汝」を。

「我ならぬ我」というのはなかなか面白い言葉です。あるいは「第二の我」というような表現もある。我と汝。「我」は神であり、「汝」はキリストです。それから、

61 汝こそは実に私の子である、
造られず、取られず、とこしへに
私にひとしき独子である。
64 太初に私はなんぢを生んだ、
私に満ち足るすべてのものを
さながら汝のうちに宿して。

お前は私の独子であると。そして、お前の中において私の一切を宿すというようなことが書いてあって、

73 ああ汝のゆえに愛は飽き足り、
また汝のゆえに愛は渇く、
何をもてか汝を祝福しようと。

というようなわけで、この二つの関係はやはり愛である。愛は満たされつつ渇き、渇きつつまた満たされていくというようなわけでしょうね。

それから、キリストとエクレシアとの関係が歌われていまして、

106　いとうるはしき佳耦を私は
　今より汝のためにつくらう、

というのはエクレシア、キリストを信ずる群のこと。

109　なんぢの新婦として、体として。
　印のごとく心に腕に、
　とこしへに彼女は汝につき、
　汝は彼女を恋ひ慕ふであらう。

と。キリストとエクレシアとの関係をそういう夫妻ないし恋人同志の関係みたいに非常に深い、「彼女は汝につき、汝は彼女を恋ひ慕ふであらう」なんていう表現で語っている。この辺はだいぶ雅歌書の言葉が背景になっているのではないかと思われます。藤井先生は雅歌書のことは特別に出して歌ってはいませんが、詩句の中にはチョコチョコ出てくる。

124　ああ汝の合はせたまふべき佳耦、
　みてのわざなる聖き新婦、
　わたしの愛のゆきめぐる体！

これが即ちキリストの愛が我々の中にゆきめぐっているという、あるべき姿をかなり先走って歌ってしまっているわけです、天界において神とキリストとの会話において。

第3歌「天使」。天使は、即ち神の使いは、エクレシア、新婦の侍女である。それは羔の婚姻の饗宴にやがて仕えるべき者でもある。しかしまた、天使は創造のうちの最初のもので、初穂である。

40　神の聖使、新婦の侍女、
　祝福まれし饗宴に備へすべく
　選ばれたる創造の初穂。

そして、「天の万軍」というような言葉もある。侍女でありましても、天使の中には実に勇者がいるわけで、ミカエルとかガブリエルのことも出てくる。

43　聖座を共にしつつ子は父に
　従ふやうに、義しき秩序は
　永遠に神のよろこびである。

46　数へがたき蒼穹の星も
　大いなる律法のもとにおのおの
　粛然として所をまもるごとく、
　宇宙の秩序という。この秩序ということ、

49　生ける天の万軍はいやまさりて
　秩序を理想のすがたに示す、

服従に調和を孕(はら)みつつ。

この「服従」という言葉はよく出てくる。それから「秩序」。今は悪平等ですね、このいわゆる民主主義は。けれども、もっとはっきりと秩序ということ。秩序そのものがすぐ権力を持ってはいけませんけれども、秩序がなくてはいかん。そして、この服従。服従という言葉はちょっと窮屈な言葉なんだな。へたすると屈従になってしまう。むしろ「信従」と言いたいわけですね、信じ従うこと。信従という言葉は先生は使わないようだけれども、信従という言葉はあるんですよ、仏教の方にもある。

「信頼」という言葉は先生はよく使った。「妻が夫に服従する」ということは、もう絶対服従だったから、藤井先生の結婚観は。今の方々にはとても受けとれない話です。それほど服従するから、また夫の方は決していわゆる権力的にあってはいけないという自覚がなければ、そのことは成り立ちませんけれども。むしろ信じ従う、信頼、信愛関係の方がいいだろうと思います。

第４歌「宇宙」。これはなかなかよく歌われている。この大宇宙のことを先生はその当時の天文学をだいぶ勉強したらしい。今からいうと、少しこの文字は、数字はおかしいけれども。とにかくしかし、この大きな大宇宙が、

49　ああむらがる千万の星また星、
　　荘厳なる太陽の密集団、
　　天使(みつかひ)と名を通はす天の万軍、

と。そして、詩篇19篇のことが多少出てきます。そして、黄道十二座を信仰的な角度から歌っているのが、これは先生独特の掴(つか)み方で大変面白い。山羊座、水瓶座、天秤、処女(おとめ)、蠍(さそり)、射手(いて)、双魚、白羊、牡牛、双子(ふたご)、蟹(かに)、獅子なんてなわけで、この十二座のことが実に巧みに織り込んである。ここらは非常に先生の詩的な豊かさを思わせる。こういうのは面白いですがね、あまり聖書そのままのことを歌ってあるところはちょっと飽きてしまう。

それから、第５歌「地の創造」ということになる。創造はもちろん愛におけるので、

13　鳩――静けくもまた恵ましき
　　その象徴(かたち)をこのむ神の霊、
　　愛といのちと光との霊。

「愛といのちと光との霊」という。そういう霊が漂(ただよ)っていて、そして、

22　「光あれ！」と、暗(やみ)を衝(つ)いてたちまち
　　高らかに響く荘厳の言(ことば)。
　　地の創造ここに始まらんとする。

ここのところはむしろ聖書よりもなお新約的な角度が強い。これはヨハネ的ですね。愛と生命と光。「リーベ」(Liebe)「レーベン」(Leben)「リヒト」(Licht) ですから、私がよく言うところの「三つのエル(L)」です。もう一つこの「霊」の「ルフト」(Luft) を入れると四つ

になるけれども。

154　混沌は地に、地は生命（いのち）に進み、
　　かつ進みて、つひに見る、ここに、
　　いみじくも大なる揺籃（ようらん）は成るを。

地は即ち人間の園であり、また揺籃であるというようなわけで、その創造のことが第一日、二日の所に書いてある。

●第6歌「人の創造」、第7歌「安息」、第8歌「明星の没落」、第9歌「禁断の果」

第6歌「人の創造」。今度は、創世記の第1章27節や第2章の始めの方なんかがもとになっている。いろんな生命が地上に出来たけれども、まだひとつ大事な生命が欠けている。それが人間なんです。

46　より高き生命（いのち）、それよ、上より
　　吹き入れられたる生（いのち）の霊、
　　神のいぶきにかよふ人の霊。

49　恵まれたるかな、霊を受けて、
　　ここに人は自然を超越し、
　　見えざる永遠の国につらなる。

という句は注目すべき句ですね。人間は本来もう、見えざる永遠の国につらなるように霊をいただいているんだと。「息を吹き入れた」というあの「息」という字は、「霊」「ルーアッハ」でなくて、「ネフェシュ」（魂）という字が使ってありますけれども、要するにしかし、霊には相違ない。そこで、

55　ここに聖霊の接吻（くちづけ）を受け、
　　愛と義との杯をみたされ、
　　遂に化せられて神に似んとする。

58　ああこの祝福の霊にこそ
　　聖き霊のおもかげがある、むべ、
　　人は神に象（かたど）られたのである。

聖霊のおもかげがあると。「ここに聖霊の接吻を受け」というような、ちょっと新約的に言い過ぎてしまった面はありますけれども、要するにしかし、やがて「神に似る」という、

「神の似姿に造られている」

という言葉から来ていると思います。非常に人間というものが――「ひと」というのは「霊が止（とど）まる」のを「霊止（ひと）」と書きましたね――正にこの神の霊の止まった、永遠に連なっているものが人間である。その点で他のものと違うという、人間の本質をはっきりとその点で歌っているわけです。そして、

91　自由なる存在者として、なんぢは
己が意思により、一たび私に
全き服従をささげねばならぬ。

その自由は、神に全き服従をするためなんです。自由と服従がここで一つです。ということは、この自由はいわゆる我が儘（まま）の自我の自由からぬけて、服従によって天的な自由を得るという、その逆説的な自由です。

121　女性よ、人の栄光よ、天地の
いと美はしきものよ、なんぢのまへに
シャロンの野花、谷の百合も羞（は）ぢらふ。

というので、花よりも女性の方がうるわしいというわけです。

136　「之れ！　わが骨の骨、わが肉の肉！
之は女と呼ばれるであらう、
之は男より取られたゆえに。」

これは日本語でいうと分からないが、ヘブライ語では「おとこ」という字に語尾を付けると「おんな」という字になる。「イーシュ」（おとこ）、「イッシャー」（おんな）という字です。ドイツ語だと、「マン」（Mann）、「メンニン」（Männin）という。ルッターがそういうように訳している。

「わが骨の骨、わが肉の肉」

という。即ち、男は頭で、女は体（からだ）である。キリストは頭で、教会、エクレシアはその体である。この「わが骨の骨、わが肉の肉」という言葉は、いつか私が言ったように、

「キリストはわが霊の霊である」

ということ――これは先生は歌っていませんよ――我々にとって今度は、

「キリストはわが肉の肉、骨の骨」

ということがまた言えるわけです。即ち、我々はこの相対的な肉体の奥に霊体をいただいてくるから、信仰の世界では御霊をいただくと、霊の霊をいただくと、「キリストが即ちわが骨の骨、肉の肉」というような具体的な生命になる。復活的生命はそれだからね。

「汝はわが復活の生命である」

ということはそういうことだから。そこまでも言えるわけだ。まぁ先生もちょっとびっくりしてしまうかも知れない。

第7歌「安息」。この安息において非常に歓喜があって、面白い句があるね。「この日」というのは安息日。

115　この日ゆえに六日は虚（むな）しくない、
そはわたしの歓喜（よろこび）こそ創造の
源（みなもと）でもあり目的（めあて）でもあれば。

なんていう句がある。歓喜が創造の原因でもあり目的でもある。ベートーベンの第九シンフォニーみたいだな。「アンディフロイデ」「歓喜に寄せて」。それはもう「羔の婚姻」そのものが大歓喜の世界だからね。福音が大歓喜の音信（おとずれ）「ユーアンゲリオン」という。

第８歌「明星の没落」ときて、これはサタンだ。首座天使の一人が落っこちた。

79　サタン！ 私への永遠の叛逆者！
　　なんぢみづから挙（あが）らんとするゆえ
　　私はなんぢを地に擲（なげう）たう。」

自ら挙がろうとする。これがサタン的衝動。「私は神と競う」という。競争意識、闘争意識はサタンにへたするとみんな連なっている。労資闘争なんてね。神に成ろうとする。自分は自分の力で神と争うとする。サタンの霊の質は妬（ねた）みと争いです。妬みと争いは、「男は争い、女は妬む」というが、これはみんなサタンの角度ですから。

145　ミカエル軍の勝鬨（かちどき）たかく、
　　「ああ、あしたの子、明星（みょうじょう）よ、なんぢ、
　　なんぢ、いかにして天より落ちたか。

これはイザヤ書の言葉ですね。……

第９歌「禁断の果」。ここでサタンの誘いの声が正にそれなんです。イブに向かって、

79　「女よ、なんぢ真（まこと）にそれを信ずるか、
　　私はいふ、汝ら死ぬべくもない。
　　善悪を知るこそ人たるに適（かな）へば。

82　神は知る、なんぢら之を食ふ日に
　　目ひらけて汝ら神のごとくなり
　　栄光を彼ときそふに至るを。」

ちゃんとここに書いてある。

「神のごとくなって、栄光を、誉れを神と競うに至る」

と言って、サタンがイブに誘惑をかけてきたわけだ。それから禁断の果を食べてしまって、それからあとのこの句がちょっと注目を要する。

127　至高者（いとたかきもの）にそむきてアダムら
　　始めて嘗（な）め知る、悪の味（あじはひ）。
　　すなはち道徳の目ここに覚めて。

道徳の目が覚めたら悪の味わいがわかってきた。

130　覚めて互に見交（か）はせば、いかに、
　　霊のかがやきその身より失せ
　　罪もあらはに、みにくき裸体！

善悪を知るの樹の果を食べてしまったらば、道徳の目が覚めて、霊の輝きが失せたという。

これは非常に暗示に富んだ言葉です。「裸でどうの」なんていうことはどうでもいい。「霊のかがやき」という。御霊に満ちていると、何となくその人は輝いてくるね、底光りがある。即ち、霊的な、天的な自然――天的自然とでもいうかな――天的な自然ですね、神・キリストに即しているところの。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というこの「即」の世界の、この即的な即如の世界は本当に自然なんです。霊的な自然なんです。そこには自ずからこの輝きが発している。

「善悪を知る」ことは、それ自身は悪くないけれども、善悪を言挙げしてまだ相対的な判断をしている世界。これは道徳の目が覚めてしまうと、悪の味わいや善だのと、そういうことの区別です。人間は残念ながら、そういう道徳界を、ある意味において行かざるを得ない。普段の世界では非常にそれが多い。それでしばしば良心の声が踏みにじられては、勝手なことをやっているわけです。それがどうにもならないから、パウロもルッターも、こっちの坊さんも、みんなそこで行き詰まってしまって、

「ああ、われ悩める人なるかな」

なんだよな。この善悪の世界でもってやっている。ニーチェが「善悪の彼岸」と言ったのはひとつの真理はあるんだ、もちろん。善悪の彼岸に超越しなくてはいかん、超えなくては。その超越した世界は即ち、霊的自然、必然の世界、霊法の世界。それから落ちてしまったわけです。幼児（おさなご）というのはそういった区別がない。スッと全的に行っているからね。こっち〔分別の世界〕はパリサイなんだ。信仰の世界でも、これをやっているうちはいつまで経ってもダメ。これを全然なしで生きろといったって、これは無理ですよ。その意識は正直持っている。持っているけれども、その意識をもうひとつ奥の世界で超えてしまっている、という世界なわけです。これが絶対に宗教の世界が、道徳のもうひとつ高い世界であり、またもうひとつ奥の根っこの世界であるということを言わざるを得ない。

●第10歌「羔」、第11歌「嘆き」、第12歌「日のすずしきころ」、第13歌「呪はれし地」

第10歌「羔」。この「羔（こひつじ）」はとにかく読んでいただかないと、大変なところですから。この第10歌は上篇の傑作の一つです。ここは徹底的にキリストのことが歌われている。しかし、あまりに歌い過ぎてしまったという感じもなきにしもあらずだけれども。要するに、

「どうしてもこの禁断の果を食った人を救わなければならないが、義と愛をどうしてくれるか。神は義でありながら、神は愛であるが、それはどうしたらいいか」

という、神とキリストとの問答が出てくる。そこで、キリストの答のところに、

91　「父よ、許婚（いいなづけ）未だしとはいへ、
　　私の佳耦（とも）たるべく造られて、
　　人は既に私の有（もの）である。

これはもちろん天界のキリストです。

94　人において私は己を見る、

私たちにおいてキリストは己を見る。こんな破れ器を「己を見る」と仰るのはどういうことかというと、

その罪はまさしく私の罪、
その受くべきものは私の分。

キリストは我々の罪を自分の罪として、「どうか、神さま、彼らの罪を見ないでください」というわけだ。

97　されば父よ、ねがはくは容(ゆる)せ。
なんぢの子なる私を惜まず、
義の要求(もとめ)のために渡さんことを。

100　私に負はしめよ、人の罪を、
飲ましめよ、その混ぜあはせたる
さかづきを、私に、ねがはくは。」

即ち、義と愛の混ぜあわされた杯をね。

103　「わが子よ、善くこそ、善くこそ、なんぢ言ふ、
かくもわが心にかなふ言(ことば)を
私は嘗(かつ)て聞いたと憶(おぼ)えない。

106　子よ、まことに我らは愛である。
愛をして罪を背負はしめよ、

ここのところに、「愛」は、ときている。

しかして永遠の義を充たさしめよ。

この義と愛がここで正にひとしい。罪を処分しなければならない。これが義であるが、そいつはいきなり人間にやったら、人間は亡びるから、

「そいつはみんな私が引き受けます」
「よし、それではお前に特別に罪を負わせる」

と。「アザゼルの山羊」にする、あるいは十字架を負わせる。

「そうしたら、私の義がそこで全うされる」

と、痛みから砕けへくる愛です。

〔註：アザゼル Azazel。贖罪の日の儀式に関連して記される、荒れ野の魔神（レビ16・8、10、26）。儀式のために二頭の山羊が選ばれ、一頭は贖罪の献げ物、一頭は民の罪を負ってアザゼルに送られる。アザゼルはこの罪を負う山羊を受けとる魔神である。伝説によれば、山羊は赤い糸を角につけて荒れ野に追われ、断崖から突き落とされて死ぬと赤い糸が白く変わり、罪の除去が確認されるという。（新共同訳聖書辞典より）〕

神の深刻な痛みをはたと受けとって、砕けたのがキリストである。だから、キリストの愛は砕けの愛と、私は言わざるを得ない。そこで、その苦杯を飲むということをずっと預言的に書いてあるわけです。そして、一番あとに先生が、

145　然り、アーメンと、私も今より
　　このとこしへの讃美に和すべく
　　いと小き竪琴をとりて立つ。

148　ああ羔、屠られし羔！
　　神のため、また我らのために
　　苦き滓を飲みたまひし羔！

151　知らず、なんぢのために何すべきかを。
　　ただねがふ、我らをして天に地に
　　うたひつづけしめよ、汝の歌を。

と言って、先生はそういうところで詠嘆しているでしょ。だから、叙情詩になってしまう。これは実は、付け加えなくていいんですよ、こういうのは。神とキリストとの問答だけで。かえってその方が力強い。

それから今度は、第11歌「嘆き」。嘆きは――せっかく自分たちは自然である――自然が嘆いている。人間が罪を犯してしまってどうにもならんと。その自然の嘆きを言っているわけです。そしてその自然の姿にその「さみしび」を見て、藤井先生がそのところを――

64　自然はひとしく我らをそしる、
　　宇宙は聯なりて我らを逐ふ、
　　もはや置くには堪へぬとばかり。

これはちょっとちがった所だな――。とにかく、自然が非常に嘆いて、そして最後に、今度はその自然の嘆きにぶつかって、こちらも困ってしまって、

118　誰かあらぬか、我らのために
　　避所となり盾となりて
　　みまへに我らを蔽ふ者は。

121　誰かあらぬか、我らのために
　　渦まく浪のさなかに立ちて
　　我らを支ふる千歳の磐は。

124　ああ誰かあらぬか、思ひに過ぐる
　　わざもて、聖怒をみたしながら
　　われらを救ふ中保者は。

と言って、中保者を求めている呻きが一番終わりに書いてある。

第12歌「日のすずしきころ」というのは、アダム・イブが罪を犯して、樹々の中に隠れ

てしまった。そうしたら、「汝は何処にあるか」と問われるところです。

43　「なんぢは何処に居るか」と、みこえ、
　厳しといへば上なく厳し、
　しかしまた聞かぬか和きひびきを。

「汝何処にあるか」という問いかけは、厳しい審判の問であると同時に深い顧みの問であるということを歌っている。そこは大変いいところですがね。

やがてその女の裔と蛇の裔に怨みを置いて、やがて蛇の頭は砕かれるであろうということが聖書の通りに書いてある。そして、自分たちの作った無花果の葉の裳はダメで、

139　「さらば汝ら」と神いふ、「脱ぎ去れ、
　おのが手のわざなる小き裳を、
　完き衣をいま私は着せる。」

142　ここに彼ら、屠られし獣の
　おほいなる皮衣を見いだして
　纏へば、やすし、かぎりなくやすし。

145　ああ皮衣！　信ずる者みな
　価なく着せらるる完き衣、
　屠られし羔の義の衣。

無花果の葉ではなくて、今度は皮衣を着せられる。その皮衣は即ちキリストの義という意味で歌ってある。即ち、我々の、自分の人間の自らの業でなしたって、それはダメなんです。即ち、業の義はどうにもならん。キリストの皮衣を着せられて初めて完きものであるということがちょっと出てくるわけです。そしてやがて、

148　「汝ら園を出でよ、婦の種
　来りて蛇を踏み砕くまで
　生命の樹は守られねばならぬ。」

蛇の裔が砕かれるというのはサタンがやっつけられる。サタンがやっつけられる時までというので、キリストが出てくるまで。キリストが出てきて、サタンがやっつけられたら、この生命の樹の果は今度は食らうことができる。即ちキリスト自身が生命の樹ですから。キリスト自身が生命の樹の果で――まぁそこまではっきりこの詩には歌ってありませんけれども――裏を読めばそういうことになる。そして、生命の樹の実質は聖霊のことになる。

第13歌「呪はれし地」。さっきのは「呪われし地」の所だったな、非常にさみしい姿で、いろんなものを見ても、どうも光がないと。そこで、さみしさの面から今度は先生自身が自分の気持ちで――奥さんがいませんから――

64　嗚呼、自然よ、我がいとも親愛なる
　友よ、恐らく私のために

67　遺(のこ)されしただひとりの友よ、
　なんぢ、その比ひなく美はしき
　装ひの下に、ほほえみのかげに、
　秘むるか、かくも深きさびしみ。
70　いまなんぢが胸の鼓動に触れて、
　なんぢが密かなる気息を感じて、
　痛む、なんぢが友のこころ痛む。

自然におけるところの、特にこの武蔵野の秋のさびしみというものを先生は身に感じていたようですから、こういう詩句が、特別に個人的な詩句が出てくるわけです。けれども、

103　況(ま)して私はわが業(わざ)を惜む、
　さはれ人なくて何の自然か、
　魂(たましひ)おきて何の躯(むくろ)か。

というわけで、今度は人間自身が本当に回復されなければ自然はどうにもならんぞというわけで、そういうように言い返してあるところがあります。

●第14歌「血は叫ぶ」、第15歌「洪水」、第16歌「バベル」、第17歌「選民」、第18歌「窖の煙のごとく」、第19歌「モリアの山」

第14歌「血は叫ぶ」で、カインとアベルの、アダムとイブの神に背いた罪の第一の罪の果が殺人ということになるわけだ。だから、殺人は罪の一番すごいやつ。殺人は人類の歴史の終わりまで絶えない。戦争で人を殺せば勲章だなんて、おかしなわけです。それが「血は叫ぶ」という、カイン・アベルの血が叫んでいる。

25　その日より平和は兄に失せた。
　その面は断えず伏せられた、
　暗きおもひが彼を捉(とらえ)た。

「平和」という言葉が使ってあるが、私なら「平安」と書きたいところです。魂の平安が失せてしまった。

103　かの瞳のかがやき、今いづこか、
　美しき血しほは始めて冷えた、
　「ああ死よ、死よ」と、戦慄しつつ、カイン。

けれども、そのカインが――これは聖書を先生は無批判的に受けとって、資料的にいろんなことを考えないですから――そこで、またカインの裔が別に呪われるのではないということが終わりの方に書いてある。それはカインが多少悔い改めた気持ちをもったから。

142　「私は生きる、わが悦びは
　悪しき者の死なんことではない、

145　その翻りて生きんことである。
大いなる日が我らを待つ、その日、
私の創造りし人の子のうち
一人も漏れざれと私はねがふ。

148　今アベルの血審判を呼ぶ、
しかし汝のため更にまさりて
ものいう血が注がれるであらう。

カインという悪しき者も翻って生きることが私の願いだから、カインをそのために復讐してはいかんという意味のことであるわけです。

第15歌「洪水」。洪水は、カインの末裔も、それからアベルの代わりにできたセツの子らも、やがてどっちもダメになってしまって、やがて審判がくる。それで洪水のことが出てくるわけです。大洪水のことがずっと書いてあって、あと、虹の契約の永遠の約束のことがちょっと出てます。

それから、第16歌「バベル」。このバベルの塔は創世記第11章です。要するに、人間の業が天にまで届こうとする。しかしながら、本当の一つの霊を受けることをしないでやっていれば、みんな分裂してしまって、分裂と混沌である。

109　おお混乱よ、分裂よ、戦争よ、
不信の果なるいと苦がきものよ、
その味は私に適はない。

ところが、霊を受ければこの分裂は――これは私が解説するんですが――分裂は悪くない。分裂は特殊性となって今度は動いていく。混沌は今度はいろいろな多種多様の調和に動いていく。分裂と混沌を特殊性と調和に持っていくものはこの御霊です。皆さんの顔がみな違うように類型的ではない。一人びとりは天下一品です。それは特殊性なんです。そして、これが本当の大きな調和になるのは、その特殊性がみな本当にそれ自身、御霊において十全に生かされるときに大きな大調和になる。それは交響楽と同じことです。

12　末の日、私はなんぢら凡てに、
子女に、若者、老人に、
ひとしく私の霊を注がう。

その末の日にそういった霊を注ごうということまで歌ってしまっています。特殊性とか調和とかいうのは私が今付け加えた解説ですけれども。

第17歌「選民」のこと。選民を起こす。それは万民の父としてアブラハムのことに向かってくるわけです。

第18歌「窖の煙のごとく」になると、創世記19章のソドム・ゴモラのことが出てくる。アブラハムと旅人とのことが出てくる。

第19歌「モリアの山」で、いわゆるアブラハムがイサクを献げるところの情景がまざまざと歌われている。

127　エホバの使者ふたたび天より、
　「エホバ言ひたまふ、なんぢ能くこそ
　　私のために此事を成した。
130　私はひとりにて酒槽を践む、
　　わが服飾けがれつくすまで
　　ひとりにて之を践まうとする。

キリストがついに独りで十字架にかかって、罪の贖いをする。そのこころを既にお前はイサクを献げることによって予表しているわけだと。

133　もろもろの民のなかに、絶えて
　　私とともにする者はない、
　　怪しと私の見るまでに、無い。
136　ただなんぢ、なんぢのみ私を識る、

「なんぢ」というのはアブラハムに向かって。アブラハムのことを「友」と言った。

　　ああわが友！　独子をわたすものの
　　そのさかづきはいかに苦がいかな。

●第20歌「棘のなかの火」、第21歌「過越」、第22歌「シナイ山」

それから、第20歌「棘のなかの火」でもって例のモーセに、「モーセよ、モーセよ」といって顕れてきたあのシナイの曠野のホレブの山のことです。そこで、藤井先生の訳では、

「私はあらんとする者であろう」

と訳してありますが、これはいつも私が言っている、

「私はありてあらしむる者」

と言いたいところ。「何であらんとするか」ということは、そこはまたいいところです。

73　神すなはち牧者に答へて、
　「わが名、私の永遠の名を
　　モーセよ、いま顕はに汝に示す、
76　私はあらんとする者であろう、
　　あらんと私がちかふところの
　　げにその者にて私はあらう。
79　私はある、永遠より永遠に、
　　私はある、自ら生きに生きて、
　　私はある、何ものにも頼らず、

82 もろもろの天の上なる天に、
いと高きシオンに、時なき国に、
三位の充実をもて私はある。
85 素より何の欠乏ありて
もしくは誰に負うところありて
私は更にあらんとしようか。
88 欠乏ではない、負債ではない、
ただ愛！　愛こそは負はざる負債、
ともしきことなき切なる要求。
91 愛はただにあるをもて已まない、
愛はかならず花さき実のる、
愛はいや新しくあらんとする。
94 私は愛である、原始より
わが聖霊によりて限なく
わが独子を私は愛する。

神のあらんとするという気持ちは愛である、ということを特に言っているわけです。

97 もろもろの天の天に永劫に
根ざせるままに咲かず実らず、
ただあるをもて私は已まうか。
100 見よ、愛はうごく、私はうごく、
充ち足る私は更に溢れる、
ある者、私はなほあらんとする
103 永遠の国より時の国へ、
見えざる世界より見ゆる世へ、
絶対の嶺より歴史の野へ。
106 私はあらんとする、創造の神、
私はあらんとする、救贖の神、
然り、誠に私はあらんとする、
109 おほいなる羔の婚姻の神！
わが理想、わが言、わが子なる
羔に尽きせぬ祝福あれと

「理想」というような言葉がやっぱり出てくる。あの先生の時代は理想主義的な面が主導的にあったですから。

112 いとも聖くいとも美はしき

新婦（はなよめ）を彼のために備へて
　とことはに一つならしむる神！

それがこの「あらんとする」ということの内容をあとから敷衍（ふえん）して言っているわけです。それから、第21歌「過越」のことが出て、贖罪の血のことが書いてある。第22歌「シナイ山」。シナイ山でモーセの十誡。ここは、ばかにあっさり書いて、出エジプトの記事が完全に省かれてある。ちょっとこれはもの足りない。シナイ山もやはり、

43　「私はエホバ、汝の神、かの
　エジプトの地より、奴隷の家より
　汝をみちびき出せしエホバ。

46　なんぢわが面（かほ）のまへに一人（ひとり）だに
　他（あだ）し神をもつな、天にも地にも
　なんぢの神は唯一人（ただひとり）である。

やっぱり、「持つな」という言い方になって、「ないのだ」というような断定的な言い方ではない。先生の詩の中には、「であろう」という言葉が相当出てくるので、そのところはちょっともの足りないような感じが時々する、「であろう」というような言い方が。もう少し断定して仰ってもよかったと思う。それから、ずっと行きまして、詩の終わりの方に、

118　なんぢ心を尽し、精神を尽し、
　思を尽して、主たる汝の
　神を愛せよ。これその第一。

121　第二もまた之にひとし、いはく
　なんぢの隣人（となり）を己れのごとく
　愛せよ、愛こそ律法（おきて）をみたす。

124　見よ、汝の神エホバ私は
　愛である。私の愛するごとく
　汝も愛せよ、誡命（いましめ）はこれ。

127　ただこれのみを私はなんぢに
　要（もと）めもとめる、すなはち私の
　聖きがごとく汝も聖かれ。

自分が愛であるということを言って、そして「愛せよ」と。まぁ新約のキリストの角度からいきなりここに持ってきたわけですが。律法の根本精神は、「神を愛する」ことと「隣人を愛する」ことに極まるという、キリストの福音書に出てくる通りなんですが。

そこにも歌ってあるわけですけれども。どう考えても、あのモーセの十言というのは、非常に積極的に愛という言葉が、愛という概念が出てこない。確かに、やはりいましめ的な角度、あるいは禁止でなくても――何と言いますかね――何か少し義の面が強すぎる。何といっ

ても律法です。

それから愛するということが出てくる。どうしてキリストは律法を、人の根本精神は愛であるということを言ったか。論理的に持ってきたのではなくて、そこにひとつの飛躍がある。申命記あたりには福音の角度が出ているんです。出ているけれども、律法そのものから、モーセの十誡そのものから、

「心を尽くし精神を尽くして神を愛せよ。隣人を愛せよ」

ということは出てこないです、十誡からは。「殺すなかれ」でしょ。あるいは「殺人しない」とか。とにかく否定的な言い方です、すべて。「姦淫なし」「盗むなし」「偽るなし」と。前向きの肯定的な明るい言葉とちょっと違う。人間の罪に対するところのひとつの戒めの角度から言われている。何といってもその性格が強いんです、この十誡は。

だから、律法からどうしてこの福音に来たのだろうかと。そこのところがちょっと飛躍があるものですから、いきなりこれを読んでいると、ピンとこない面がありますが。だから、申命記あたりの言葉をここにもし入れてくれれば、そこの媒介が出来たのではないかということもちょっと思うんですけれども。

●第23歌「幕屋」、第24歌「ダビデのひこばえ」、第25歌「静かなる細き声」、第26歌「かなしみの人」、第27歌「はるかなる曠野のなかに」

第23歌「幕屋」。幕屋の構造のことが出て、また本質のことが書いてあるんですが、これはもう言わなくても分かっているでしょう。ヘブル書10章のあたり、それからもちろんレビ記あたりのことも出ている。「アザゼルの山羊」の贖罪のこと、幕屋の中の至聖所の贖罪の事態のことも描かれている。祭壇のことも描かれている。

97　ああ義をさけぶ永遠の律法（おきて）と
　　接吻（くちづけ）して、いかに柔き
　　恩恵（めぐみ）と平和の贖罪所ぞ。

即ち、贖罪所ですね、幕屋の一番至聖所に律法を置いたでしょ。律法が置いてあって、その上に天使が両方から羽をもって覆っている。これが即ち贖罪の象徴なんですけれども、そのことがここに書いてある。「恩恵と平和の贖罪所ぞ」というところは、私に言わせると、「平安」になりますけれども、そういった句はちょっと注目を要する句です。そして、そういった幕屋において、贖いの幕屋であるから、

133　「われらの宥（なだめ）の供へものは
　　すでに屠られ、われらのアザゼルは
　　すでに放たれた」とおのづから

136　歌は民らの口にあふれて、
　　「福（さいわ）ひなるかな、その愆（とが）ゆるされ、

その罪まったくおほはれしもの。

詩篇32篇の有名な言葉で始まっている。これは大変いい一句であります。

それから、第24歌「ダビデのひこばえ」、サムエル後書第7章のところが出てくるところで、そしてこのダビデがやがてメシヤの型であるという。ダビデのひこばえ即ちメシヤの印であるところのダビデ。「ひこばえ」はもちろんキリストですが。

46　知れ、なんぢは私の初子（うひご）である、
　　患難（なやみ）の君なるわが独子を
　　その萌蘖（ひこばえ）にもつべき根である。

と、ダビデのことを言って、しかもこの人間ダビデは非常な罪も犯したし、一面しょうがない王様でもあったけれども、しかし、そういった器を通してもなおメシヤの預言がここに託せられているというところに福音の福音たるところがあるというわけでもあります。

第25歌「静かなる細き声」というのは先生の好きな、あのエリヤのところです。列王紀略上の19章のところ。嵐の中には神の声が聞こえないで、そのあとの静かな所に神の声が聞こえてきた。福音はそういったような柔らかい静かなものであるという。終わりの方に、

124　しかしエホバはその日のやうに
　　風のなかにはけふはいまさず、
　　はた地震のなかにも火のなかにも。
127　ただ火ののちに、私はいま見た、
　　静かなる細き声のなかに
　　エホバいまして過ぎゆきたまふを。
130　私は万軍のエホバのために
　　心燃えていた、しかし曾（かつ）て
　　かくのごとくに彼を識らなかった。
133　力うせては望みもおのづから
　　失せはてて私は金雀花（えにしだ）の
　　こかげにひたすら死を求めた。
136　今にして始めて私は識る、
　　神は烈しきよりむしろ柔和に
　　大いなるよりむしろ心卑（ひく）く
139　力よりはむしろ声にいますを、
　　わづらふ者に嘉信（おとづれ）つげて
　　重荷をみづから荷ひとるべく。

これは大事な言葉です。力がないようで実は本当の力を持っている。柔和だけれども、ただ優しいというのではなくて、柔和の中の、心低さの中の、そういう中に実は本当のど

ん底の力がある。その点がちょっと歌いがまだ足りないんですけれども、

142　まことに神もしかかるものに
　いまさずば、すべて罪の子われら
　いかにしてみまへに生き得ようか。

145　砕かず震はず焼きつくさず、

「焼き尽くす神」ということは前にも言っているんですよ。けれども、もうひとつ啓示が進むと、「砕かず」というのは人間を砕かずですよ。「震わず」――震ってね、「お前は善いの悪いの」なんて言わない――焼きつくさず、

　傷める葦を折ることをせず、
　煙れる亜麻を消すことをせず、

148　ただ静かなる細き声もて
　神の羔はきたるであらう――
　ああこは私にいかなる啓示ぞ。」

「私」というのは先生ではない。ここに問答しているところのエリヤです。

これはキリストの福音がそうですが、人をたださない。とがめない。みんな引き受けてしまう。そして、荷なってしまう。それでなかったらとてもやりきりない、というところがそこに出ているわけで、この終わりの方の句は注目すべきところだと思います。

そのあと、今度は第26歌「かなしみの人」、イザヤ書53章に来てしまうんだけれども、アモス、ホセア、ミカ、云々という預言の詩がないのがちょっと残念に思う。特にホセアのごときを歌わないとは。まぁ先生もちゃんと数をかぞえてやっているうちに足りなくなってしまったのだろうと思うんだけれども。あとは、この「かなしみの人」でイザヤ書53章が出てくるわけです。ここは非常に深刻な、大事なところです。

124　さらば羔をして飽くまでに
　屠られしめよ、その大いなる
　愛の犠牲を完うせしめよ。

130　かくてのちにおのが美はしき
　新婦を彼は見出すであらう。
　とこしへの生命を共にすべく。

133　その福ひなる婚姻によりて
　私の栄光の尽きせぬ富は
　来らん世々に現はれるであらう。

136　言ひがたき霊魂のいたつきも
　その日とみに癒えてこころゆく
　眺めに彼は満ち足りるであらう。

139　ああ義しきもの、私の僕（しもべ）
　見よ、彼は知識の霊により
　アダムの子らを義（ただ）しきにかへす。

「知識の霊」なんていう言い方は、聖書の通りの言い方をしている。この「知識の霊」なんてのはあまりいい言葉ではないけれども。霊知ですよね。

第27歌「はるかなる曠野のなかに」というので、これはエレミヤのことです。エレミヤとダンテは、先生は特に好きでしたから。預言者エレミヤのことは、エレミヤ書をかなりよく克明にあとづけて書いてある。エレミヤは非常に心の、ハートの、腸の預言者です。

64　ああわが腸（はらわた）よ、わが腸よ、
　ああわが心の底の痛みよ、
　わが胸とどろく、黙（もだ）しがたい。

というのはなかなかいい詩です、詩そのものとしても。

●第28歌「俘囚（ふしゅう）」、第29歌「時は満てり」、第30歌「降誕」、第31歌「ヨルダン」、第32歌「誘惑」、第33歌「祝福」

第28歌「俘囚」、とらわれ。これはエレミヤ哀歌の内容が歌われて、バビロニヤに行ったことよりもむしろ、囚われになる前のエルサレムの悲惨な状況が書いてある。これはあまり聖書の文句がそっくりそのままでありますけれども。それからこの俘囚から、バビロニヤから帰還してからあと、キリストの出現までの歴史が完全に抜けてしまっている。

第29歌「時は満てり」というので、天上において神はキリストと問答して、いよいよこれから「お前は降っていくんだ」というようなわけで、降臨のこと。

第30歌「降誕」のこと。これはもうクリスマス。

第31歌「ヨルダン」。ヨルダンで聖霊のバプテスマのこと。

第32歌「誘惑」。サタンの言葉あたりと、キリストの言葉をかなり敷衍（ふえん）してうまく書いてはあります。

124　「サタンよ、退け。録（しる）されてある、
　いはく『主たる汝の神を拝し
　ただかれにのみ仕へまつれ』と。

127　わが国は此世のものではない。
　汝に属するむなしき栄華
　私に何の関係（かかはり）あらうか。

130　人の子は必ず苦難を受けて
　天の栄光に入らねばならぬ。
　十字架こそ私の分である。」

と言って、ペテロの言葉にも、またサタンそのものの言葉にもやはり十字架をもって答えておられるわけです。

第33歌「祝福」。これはキリストの「幸いなるかな」の山上の垂訓のことがずっと展開しているわけです。

43　兄弟にのみ挨拶するとも
　何の嘉(よみ)すべき事があろう、
　異邦人も然(しか)するではないか。

46　さらば天の父の全(まった)きがごとく
　汝らも全かれ、至高者(いとたかきもの)の
　子にふさわしく汝らも愛せよ。

という言葉でそこは極まっています。

49　なんぢの右の頬をうつ者には
　左をも向けよ、なんぢの上衣(うはぎ)を
　取る者には下衣をも拒むな。

52　およそ求むる者には与へよ。
　すべて人にせられんと思ふ事は
　その如くこれを人にもせよ。

なお、キリストのいろんな奇跡のことやあるいはもう少し福音書の内容はもうちょっとたくさん歌われてよかったのではないかと思うんですけれども、まぁスペースが足りなかったんでしょう。終わりの方は、あの香油をぶちまいた女のことが書いてある。

121　なんぢら学者たち、往きて学べ、
　『われ憐憫(あはれみ)を好みて、犠牲(いけにへ)を
　好まず』とは如何なる意(こころ)か。

124　義しき者を招かんとにあらず
　罪人を呼ばんために私は来た、
　失せたる羊を見いださんために。」

●第34歌「ゲッセマネ」、第35歌「ゴルゴタ」、第36歌「復活」

第34歌「ゲッセマネ」。ゲッセマネの祈りです。

70　父よ、もし聖旨(みむね)にもかなはば
　この時を私より過ぎゆかせ
　この酒杯(さかづき)を取り去りたまへ。

73　しかし父よ、私の意(こころ)を
　成さんとではない、願はくはただ

聖意のままを果したまへ。

神さまのこの逆説矛盾の本願です。それが深刻に歌われているわけです。

127　また来りて見るに、一人だに
　共に覚めをる者とてはない、
　共に祈るもの、一人だにない。

130　三たび離れゆき、三たび祈る、
「ああ父よ、聖意を成したまへ！
　聖名の栄光をあらはしたまへ！」

133　赤き心臓をみづから抉りて
　永遠のそなへものにささげる
　天にある聖き祭壇のうへ。

このキリストのゲッセマネの祈りで極まるんですが、正にこのキリストは十字架において神の本願道を完全に果たした。神の本願道を往くもの。「本願道」という言葉は、非常に私はいい言葉だと思っている。我々の生涯は結局、本願道を、自分をぶちまいて行くときに、一番力強い生き方ができるんです。信頼の奥に、この本願を受けとっていなければ、信頼が信頼にならない。

それから、第35歌「ゴルゴタ」。このゴルゴタでもって民衆がみんな「彼を十字架につけろ」てなわけです。十字架の上の片一方の盗賊が、

55　暫し無言ののちまた静かに
「イエスよ、私を憶えたまへ、
　なんぢの聖国に入りたまふとき！」

58　ゲヘナの谷に白く貴き
　真珠を見るとも何の譬喩か、
　歓喜はゆる面をむけて

61　「まことに私はなんぢに告げる、
　今日私とともにパラダイスに
　なんぢは在るであらう」と人の子。

ここのところでもね、

「パラダイスに汝はあるであろう」

なんて言われると、これは困るですよね。「そうかも、そうでないかも知れない」なんてね(笑)。そこが先生はちょっと弱かったね、この「あるであろう」という句が相当出てくるので、ちょっとそれは。「あらん」という文語を「あろう」というようなことにしてしまったから、これも先生はちょっと直訳式過ぎていかんですよね。

「今日、私と共に汝はパラダイスに」

と。「あり」もへったくれもない。「パラダイスに」で結構なんです。

「今日、私と共に汝はパラダイスだ」

でいいんだ、本当は。私はそう書いている。それでなければ、ウワーッと言って喜んで、この十字架の盗賊も死ねないよね、「あるであろう」なんて言われたんじゃ。「どうも頼りない言葉だな」なんて思われてしまう。

こういうところがやっぱり無教会のちょっとあれ〔限界〕ではないかと思う。あまりに文法的良心的で、私みたいな乱暴でなければダメなんだ。信仰の世界はそれでなければもたないですよ。皆さんは、「あるであろう」と言われて、「そうすると、80パーセントあるからまぁいいや」なんて、それで間に合うかな。そんなのでは間に合わないな。御霊の世界はもっとはっきりしている。それから、

106　ああ愛しみの聖顔は失せた、
　永遠に熾る地獄の火は
　人の子の霊魂をくらうた。

109　受くべきのバプテスマは受けられた、
　酒杯は飲みて飲み干された。
　天の誓ひはつひに果された。

112　聖き新婦をシオンに立つべく
　新郎すでに己を捨てた、
　かくて悉く事は終った。

115　事みな終り、義は満たされて
　苦難つきる。すなはち最後の
　清新をもとめ、いはく「渇く」と。

118　とりあへず一人走りゆきて
　酸き葡萄酒を海綿にひたし
　ヒソプをもてその口にうつす。

121　うるほへる舌に力こめて
　たかき凱歌の序曲のごとく
　大いなる一言、「事畢る！」と。

124　あふぎて再び大音に、「父よ、
　私の霊を聖手にゆだねる！」
　　――つひに人の子の頭は垂れる。

深刻なところです。

それから、第36歌「復活」。上篇の「羔」の最後の篇。マグダラのマリヤに現れて、「なぜ泣くか？」というようなわけで、ヨハネ伝の終わりの方のことが出ています。

58　「マリヤ！」呼ばれて、血ふるひ、「ラボニー！」
　「私に触(さは)るな、私はいまだ
　父のみもとに昇らぬゆえに。
61　往きて言へ、わが兄弟たちに、
　『私はわが父、汝らの父
　わが神、汝らの神に昇る』と。」

けれども、私が解説したようにはちょっと書いてない。それから今度は、エマオ途上のことがその次に出て、

133　いとおごそかに命じていふ、
　「なんぢらエルサレムを離れずして
　私より聞きし約束を待て。
136　見よ、日ならず私は上より
　父の約束の聖霊をおくる、
　これもて汝らにバプテスマする。
139　汝ら新しき生命(いのち)に入りて
　ひとりの人に創造(つく)られるであらう、
　羔の聖き新婦(はなよめ)たるべく。」

これは非常に注目すべき句ですが、もう上篇の最後の所に来て、特にこの聖霊の約束のことが書いてある。そして、

142　「来れ。」言ひつつ彼は起(た)ちゆく、
　使徒たち従ふ、オリブの山に
　ベタニヤのぞむ静けき辺まで。
145　ここに彼れその双手(もろて)をあげて
　かれらを祝し、見よ、祝しつつ
　雲に受けられ、見えずなりゆく。
148　「ガリラヤ人よ、なんぢら何ゆえ
　天をあふぎて立つか」――かへりみれば
　白衣の人ふたり――「汝らより
151　天に挙げられたるこのイエスは
　汝らがその天にゆくを見しと
　おなじさまにして来(きた)るであらう。」
154　げに来るであらう、羔はまた
　聖められし新婦(はなよめ)をむかへて
　永遠(とこしへ)の讃美を完(まつと)うすべく。

という句で終わってある。「来るであろう」、これももう少し強く表現されてよかったのではないかと思うけれども。要するにしかし、最後にこの聖霊の約束でこの上篇は終わっているわけです。まぁ、大急ぎでもって大筋だけを申し上げたわけですが。この次の第中篇の方はもっと内容的には大変ですから。

どうも誠におそまつでございました。まぁ大体、皆さんも復習したわけです。おわります。

――上篇　完――

●（参考）

〔著作集第6巻『随想集』／一〇、藤井武と『旧約と新約』／（其二）夫人の死と『羔の婚姻』より抜粋〕

大史詩『羔の婚姻』は、その題名をヨハネ黙示録19章7節の

「羔の婚姻の期いたり、既に新婦みずから準備したればなり」

と、9節の

「羔の婚姻の宴席に招かれたる者は幸なり」

による。上篇「羔」、中篇「新婦」、下篇「饗宴」の三部曲をもって構成されている一大詩篇である。「羔」は神の子キリストを意味し、「新婦」はキリストの救いにあずかる人類を意味し、「饗宴」は歴史の終末における神の国の祝福された両者結合の歓喜を意味する。この詩の主題は、宇宙と人類の創造と堕落、これを救わんとする神の経綸とその実現による神の国の完成にある。このため著者の題材としたところは、創世記から黙示録に至るまでの全聖書と、神の選びの民からの歴史的展開である。即ち「羔」篇においてはキリストの降誕に関する旧約聖書の預言をくりひろげ、福音書のイエス・キリストに及ぶ。「新婦」篇においては、ペンテコステをもって始まるエクレシアの歴史の展開を歌う。その間、深き洞察をもって日本の世界精神史的地位と使命について歌った切々たる憂国の詩句は、現実の日本に対する一大警鐘というべきである。「饗宴」篇においては主題を専ら黙示録にとり、世界の終末的審判と新天新地への大希望を歌わんとして筆を進めたが、詩歩未だ半ばならずして著者は天に召されたのである。

藤井武がこの偉大なる主題の一大叙事詩を書くに至った起因は、さきの叙述で大方明らかであるが、彼がことに神の国完成の経綸を、キリストとエクレシアの「婚姻」として把握したことの背景としては、聖名のため純潔にして最も祝福された十年の結婚生活をいとなんだ後、突如その愛する妻を天に召されたことに発する。生死を越えての永遠的貞潔の貫きにおいて彼は、キリストとエクレシアとの関係を見、『羔の婚姻』をもって表現されるところの聖書史観の秘義をば自己の人生の血涙を通して体認させられたのであった。

この詩篇の形態は、ダンテの『神曲』に類似し、三行一連、数連一節、数節一歌、三六歌一篇、

三篇全詩の構成である。各行の字数は一四字か一五字を中心とし、文語調に口語調をまじえた独特の格調である。各歌は七連七節一四行が基準であるが、一定はしていない。詩の範疇から言えば、ホーマー、ダンテ、ミルトン、クロップシュトックの大作の部類の大叙事詩である。一歌一歌がある意味では独立の詩篇をなしつつ、大いなる有機的構造を成している未完成ながら総計実に１２９５４行の長編である。ダンテの『神曲』の１４２３３行、ミルトン『楽園喪失』の１０５５８行及び『楽園回復』の２０７０行計１２６２８行と比較して何ら遜色がない。天もし藤井に藉するさらに二歳月をもってせんか、この詩の完成は優に期せられたのであった。借しみてあまりあるのだが、この未完成がもつ無限の余韻に無量の祈りがひびいている。例えば、この詩の一節を引用すれば、

ああ秋の野の野草にやどる
　白露のごとく今この山に
　数えつくせぬ顔また顔の
いずれ一つか地にありしころ
　腸よりぞ沸きしとおもう
　涙の痕をのこさぬがあろう。
その源を封ずるために
　人の手はあまりに短きを
　験して彼らはつぶさに知った。
おのが心の的に触れえぬ
　空しき逸矢を蔑みつつ
　地の慰めをかれらは拒んだ。
ただやわらかき「時」のなだめに
　暫し思いを遠ざくるとも
　何か癒えよう、傷そのものは。
さわれ嘉き日はついに臨んだ、
　涙の壺を創造りたまいし
　能わぬことなき聖手は今のび、
見よ、あおぎみるすべての眼より
　涙ことごとく拭いたまえば
　ほがらかに眸みなかがやく。

（『羔の婚姻』下篇「饗宴」第10歌「棕櫚」の一節）

●（参考）藤井武選集の栞（第９）――本選集完結に際して

小池辰雄

顧れば、本選集第１回配本として、第５巻『イエス伝研究』が世に送られたのは、今から満８年前１９４９年の初夏であった。戦後日なほ浅く、漸く諸事態が立ち直り始めた頃、岩岡書店、藤井選集刊行を企図された。

当初は比較的順調であったが、世情の変転は出版界にも影響をもたらし、道は次第に険しくなった。岩岡卯吉郎氏は家を売り、健康を害する等の艱難に遭われたが、よくこれに耐え、８年を戦い抜き、ここに最終回の配本として第１巻『羔の婚姻』の上梓（じょうし）となり、終（つい）にその使命の達成を見るに到ったことは、編者の衷心（ちゅうしん）より感謝を共にするところである。本巻が上梓の運びとなったかげには矢内原忠雄先生の深き祈りとあつき御はからいのあったことをここに特記して、先生と編輯を共にさせて戴いた私として深謝を捧ぐる次第である。

宗教的大叙事詩、『羔の婚姻』については、本巻の「解説」及「解題」に述べてあるから、ここには触れないが、この詩に因んだ著者の片言及び詩句そのものを二、三引用して、未だこの詩を知らない人々への紹介の栞（しおり）としたい。

著者は１９２３年７月１日に某氏に宛てた書翰の中で、次のような言を洩らしている。

「僕も亦ダンテのやうに人の心の産み得る最美のものを以て、この不合理な人生に対し復讐するまでは去る事が出来ません。」

１９２３年７月といえば、『羔の婚姻』の筆が進められて三か月程を経た頃である。「ダンテのやうに人の心の産み得る最美のもの」とは、ダンテの『神曲』の如き崇高壮美なる詩篇を意味するから、著者がこの『羔の婚姻』の聖詩を指していることは自明である。然り、著者はこれを以て人生と世界に「復讐する」と喝破した。この「復讐」という語に接して、想い合わされる聖書の句がある。曰く、

「彼ら大声に呼はりて言ふ、『聖にして真（まこと）なる主よ、何時（いつ）まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給はぬか』」（黙示録６章10節）

義人の血の叫びである。神の国と神の義を慕い求めてやまなかった著者の魂の叫びが、おのずから書翰の一節に迸り出でたので、決して偶然の一句ではない。著者の黙示録講義に列した編者は、著者がこの黙示録第６章を講じたときの気魄を今もあざやかに想い出だす。ダンテにも劣らず著者は神の義の秩序を重んじた。

而（しか）もこの「復讐」は「最美なるもの」を世に投ずることによってである。「不合理な人生」に対して、著者は天来の「合理」を以て応えんとした。「最美なるもの」の中心は何か。「羔」の君、キリストにほかならない。キリスト、「羔」、救主を世に詩を以て証言することが即ち著者の意味した「復讐」であった。これはそれ自体が「最美なる」復讐である。

真理の戦烈しかった著者にとって武蔵野の自然は特別な友であった。

嗚呼、自然よ、我がいとも親愛なる

友よ、恐らく私のために
遺されしただひとりの友よ、
なんぢ、その比ひなく美はしき
装ひの下に、ほほえみのかげに、
秘むるか、かくも深きさびしみ。
いまなんぢが胸の鼓動に触れて、
なんぢが密(ひそ)かなる気息を感じて、
痛む、なんぢが友のこころ痛む。

――上篇『羔』第13歌「呪はれし地」より

ロマ書8章のパウロと共に万象の呻きを著者も武蔵野の自然のすがたに於て共感した。そして義人の血の叫びも、自然の呻きも、羔を世に与える神の大いなるあわれみの中に聴き容れられる。

私は生きる、わが悦びは
悪しき者の死なんことではない、
その翻りて生きんことである。
大いなる日が我らを待つ、その日、
私の創造(つく)りし人の子のうち
一人も漏れざれと私はねがふ。
今アベルの血審判(さばき)を呼ぶ、
しかし汝のため更にまさりて
ものいふ血が注がれるであらう。

――上篇『羔』第14歌「血は叫ぶ」より

義に強い著者はまた深い涙の人、愛の人であった。上の一節は思い遣り深き著者の心臓の文字である。

ああ秋の野の野草にやどる
白露のごとく今この山に
数へつくせぬ顔また顔の
いづれ一つか地にありしころ
腸(はらわた)よりぞ沸きしとおもふ
涙の痕をのこさぬがあらう。

――下篇『饗宴』第10歌「棕梠」より